



企画展


2021年

7月31日(土)
～10月17日(日)

時間：9時～20時

場所：岩手県立図書館

4階 企画展示コーナー



近代
いわたの
歌人・俳人

展示資料目録

はじめに

日本の伝統的な文芸である短歌と俳句。日本人は、古くから31文字・17文字という短い文章の中で、美しい風景や募る思いを表現してきました。岩手県では、全国高校生短歌大会や盛岡国際俳句大会の開催など、短歌・俳句が大きな盛り上がりを見せています。

その背景には、岩手県が優れた歌人・俳人を多く輩出していることがあります。短歌では、単なる自然や季節の賛美に留まらず自らの思いを素直に表現した石川啄木や、教育者として励むかたわら、厳しい生活のなかで歌を作り続けた西塔幸子^{さいとうこうこ}。俳句では、豊かな知識教養から生み出される高雅な作風で知られる俳人・山口青邨^{やまぐちせいそん}をはじめ、若くして正岡子規にその才能を認められ、岩手俳壇の育成者と呼ばれた原抱琴^{はらほうきん}などが岩手の文学史に名前を残しています。岩手の短歌・俳句の歴史に触れるとともに、今日まで親しまれている歌や句に対して、さらに理解を深める機会となれば幸いです。

最後になりましたが、開催にあたり、ご協力いただきました関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

岩手県立図書館

凡例

1 収録内容

短歌・俳句に関する郷土関連資料及び一般資料 169 点を収録しました。

- (1) ガラスケース内展示資料 ————— 45 点
- (2) ガラスケース外展示資料 ————— 124 点

2 記載順、記載事項について

(1) ガラスケース内展示資料は、概ね展示順、ガラスケース外展示資料は請求記号順に掲載しました。

(2) 請求記号とは、当館の整理記号(ラベル記号)です。

例) ケン=賢治文庫 タク=木文庫 K=郷土資料 J=児童書 S=雑誌

K914
フ1
1

KS=郷土雑誌 Y=ユースコーナー 新=新渡戸文庫(貴重書庫資料)

(3) 「館外貸出」の欄に“○”が付いているものは、貸出可能な資料です。ただしガラスケース内展示資料は、期間中は貸出できません。ガラスケース外展示資料は、期間中も貸出できます。また貸出中の場合は予約することができます。

目次

▼展示資料目録

【ガラスケース内展示資料】

- 第1章 短歌と俳句 1
- 第2章 近代いわての歌人・俳人 1

【ガラスケース外展示資料】

- 短歌(岩手関連/一般)に関する資料 3
- 俳句(岩手関連/一般)に関する資料 5
- その他 短歌・俳句に関する資料 6

▼参考資料 7

第1章 短歌と俳句

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
1	啄木歌碑の拓本	—	石川啄木記念館	—	㊗/9/5	×
2	盛岡歌人百人一首	本堂 親知 (官治) 撰	本堂親知	明治40 (1907)	91. 1/6/	×
3	歌よみに与ふる書	正岡 子規 著	岩波書店	1984. 1	081. 6 /㊗ /54	○
4	〔松尾芭蕉句碑拓本〕 夏草	—	—	—	21. 9/13/11	×
5	奥州俳士雅俗名録	—	—	—	新/00/18	×
6	獺祭書屋俳話	獺祭書屋主人 著	正岡常規	1895. 9	911. 304/㊗1/1	×
7	俳諧大要	獺祭書屋主人 編 [著]	ほとゝぎす発行所	1899	911. 304/㊗1/2	×

第2章 近代いわての歌人・俳人

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
8	明星 第2号 複製版	『明星』複製刊行会 著	臨川書店	1979	911. 05/㊗1/1-2	○
9	白羊舎同人写真	—	—	[19--]	㊗/6/16	×
10	一握の砂	石川 啄木 著	東雲堂書店	1910	㊗/11/42	×
11	悲しき玩具	石川 啄木 著	東雲堂書店	1912	㊗/11/43	×
12	曠野 第5巻第4号	—	曠野社	1923. 7	KS90/㊗3/5-4	×
13	郊外の丘	小田島 孤舟 著	小田島孤舟	1912. 9	K/911. 1/㊗3/1	×
14	辺土にて	小田島 孤舟 著	曠野社	1917. 4	K/911. 1/㊗3/7	×
15	賢治の短歌百首かるた	—	[宮沢賢治生誕120年 記念事業実行委員会]	2016	㊗/798/㊗	×
16	岩手日報 (マイクロフィルム複製)	大正12年12月10日 (4面) 「短歌の行者 小原節三氏に(上)」 [複製パネル]				×
17	岩手日報 (マイクロフィルム複製)	大正12年12月11日 (4面) 「短歌の行者 小原節三氏に(下)」 [複製パネル]				×
18	岩手日報 (マイクロフィルム複製)	大正12年12月21日 (4面) 「歌の世界について 下山氏へ(1)」 [複製パネル]				×
19	岩手日報 (マイクロフィルム複製)	大正12年12月22日 (4面) 「歌の世界について 下山氏へ(2)」 [複製パネル]				×
20	岩手日報 (マイクロフィルム複製)	大正12年12月23日 (4面) 「歌の世界について 下山氏へ(3)」 [複製パネル]				×
21	ぬはり[合冊資料] 第1巻第1号・第1巻第3号-第1巻第7号	—	ぬはり社	—	KS91. 1/㊗	×
22	岩手歌集 第1輯	岩手歌集刊行会 編	岩手歌集刊行会	1927. 12	K/911. 1/45/1	×
23	わくら葉	下山 清 著	岩手町教育委員会	1961. 7	K/911. 162/㊗	×
24	新樹[合冊資料] 第1巻第1号創刊号-第1巻第8号	—	新樹社	—	KS90/㊗3	×
25	西塔幸子遺稿歌集 山峡	西塔 幸子 著	大村次信	1937. 9	K/911. 1/㊗7/1	×
26	“山峡”に就いて	高橋 康文 著	高橋康文	[1937. 6]	K/289/㊗27/3	×
27	西塔幸子歌碑除幕式	—	—	1979. 11	K/289/㊗27/2	○
28	山峡の歌人西塔幸子その作品と生涯	西塔 幸子 [著]	西塔幸子記念館建設委員会	1992	K/289/㊗27/6	○
29	山峡の風景	佐藤 秀昭 著	岩手日報社	1984. 4	K/289/㊗27/4	×

No	書名	編著者名	出版者等	出版年	請求記号/所蔵先	館外貸出
30	山峡絶唱	長尾 宇迦 著	講談社	1996. 10	K/913. 6/ナガ*	○
31	紫苑[合冊資料] 第1号-第1巻第6号	—	紫苑社	1903	KS91. 7/57	×
32	書状集 原抱琴から鈴木月翁宛	太田 孝太郎(夢庵) 編	—	—	96/13	×
33	原敬句帖 複製版	原 敬 著 大慈会 製作〔編〕	大慈会	1997	K911. 368/ハラ	×
34	ホトトギス 第8巻 第10号 明治38年7月	—	ほととぎす発行所	1905	S911/ホ3	×
35	谿の音 句集	高橋 青湖 著	高橋青湖	1959	K911. 3/2/1	×
36	自然味[合冊資料] 第1号・第2号・春光号 1-2	—	岩手吟社	1920	KS91. 3/シ1	×
37	自然味 第35巻第2号 通巻第641号 終刊号	—	自然味発行所	1981	KS91. 3/572	×
38	石楠[合冊資料] 第9巻第5号 5月-第37巻第1号 1月・欠号あり	—	石楠社	1923	S911/シ1	×
39	松葉杖 句集	逸蒼 著 小林 不未鳴 編	聴覚亭文庫	1987	K911. 3/シ12/2	×
40	矮鶏 句集	宮野 小提灯 著	近藤書店	1957	K911. 3/シ1/2	×
41	夏草 第1巻第1号 創刊号	—	夏草発行所	1930	KS91. 3/ナ1	×
42	夏草 第63巻第7号 通巻650号	—	夏草発行所	1991	KS91. 3/ナ1	×
43	岩手俳句集	岩手俳句集刊行会 編	—	—	K911. 3/ナ1/1	×
44	雪国	山口 青邨 著	竜星閣	1942	K911. 3/ヤ1/1	×
45	日は永し 句集	山口 青邨 著	青邨生誕百年事業事務局	1992	K911. 3/ヤ1/17	×

* 以下の資料は、展示期間中も館外貸出できます

短歌に関する資料

[岩手関連]

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
1	金田一京助全集 第15巻	金田一 京助 著	三省堂	1993. 10	K090/キ1/57-15	○
2	新選名著複刻全集近代文学館 「一握の砂」	—	日本近代文学館	1973. 9	918. 6/シ21/14	○
3	曠野をゆく 小田島孤舟伝	堀内 正己 著	国書刊行会	1973. 3	K 911. 162 /材*	○
4	知勇物語	—	菊池知勇先生顕彰会	1998. 11	K/289. 1/キ	○
5	山峡の歌人西塔幸子 その作品と生涯	西塔 幸子 [著]	西塔幸子記念館建設 委員会	1992	K/289. 1/キ	○
6	下山清ノート	森 荘巳池 編著	翠楊社	1979. 3	K/289/シ11/1	○
7	文人高野桃村	佐藤 栄一 著	佐藤栄一	1980. 5	K/289/キ19/1	○
8	啄木その周辺	浦田 敬三 著	熊谷印刷出版部	1977	K/902/ウ1/4	○
9	菊池知勇全歌集	菊池 知勇 著	ぬはり社	1958. 8	K/911. 1/キ2/7	○
10	無告のうた	川村 杏平 著	角川学芸出版	2009. 5	K/911. 162/材	○
11	山峡のみち	佐々木 京子 著	佐々木永吉	2000. 12	K/911. 162/キ	○
12	石の船	大西 民子 著	短歌新聞社	1978	K/911. 168/材	○
13	風の曼陀羅	大西 民子 著	短歌研究社	1991	K/911. 168/材	○
14	まぼろしの椅子	大西 民子 著	短歌新聞社	1993	K/911. 168/材	○
15	小田島孤舟歌集	小田島 孤舟 著	小田島孤舟会	1968. 1	K/911. 168/材*	○
16	山峡	西塔 幸子 著	二升石小学校	1986. 10	K/911. 168/キ	○
17	暁村物語	佐藤 雅彦 著	佐藤雅彦	2001. 3	K/911. 362/7	○
18	巽聖歌作品集 下	巽 聖歌 著	巽聖歌作品集刊行委 員会	1977	K/911. 58/キ/2	○
19	山峡絶唱	長尾 宇迦 著	講談社	1996. 10	K/913. 6/キ*	○
20	宮澤賢治歌集	宮澤 賢治 著	未知谷	2005. 12	ケン 911. 168 /ミキ	○
21	賢治短歌へ	佐藤 通雅 著	洋々社	2007. 5	ケン/911. 162/キ	○
22	アルカリ色のくも	佐藤 通雅 編著	NHK出版	2021. 2	ケン/911. 162/キ	○
23	石川啄木	—	平凡社	2012. 5	キ/910. 268/イ	○
24	石川啄木歌集全歌鑑賞	上田 博 著	おうふう	2001. 11	キ/911. 162/ウ	○
25	石川啄木直筆ノート悲しき玩具	[石川 啄木 著]	盛岡啄木会	1980	キ/911. 168/イ	○
26	啄木歌集	石川 啄木 著	岩波書店	1983. 11	キ/911. 168/イ	○

[一般]

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
27	折々のうた三六五日	大岡 信 著	岩波書店	2002. 12	911. 04/材	○
28	うたの動物記	小池 光 著	日本経済新聞出版社	2011. 7	911. 04/コイ	○
29	心に染みいる日本の詩歌	塩田 丸男 著	グラフ社	2002. 12	911. 04/シ	○
30	東北(みちのく)詩歌集	鈴木 比佐雄 編	コールサック社	2019. 3	911. 08/ミチ	○
31	日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか	錦 仁 編	笠間書院	2016. 12	911. 102/ニホ	○
32	名歌でたどる日本の心	国民文化研究会 編著	草思社	2005. 8	911. 102/メ	○
33	今日から始める短歌入門	池田 はるみ 編著	家の光協会	2003. 10	911. 107 /イ	○
34	NHK短歌作歌のヒント 新版	永田 和宏 著	NHK出版	2015. 2	911. 107 /カ*	○
35	辞世千人一首	荻生 待也 編著	柏書房	2005. 7	911. 108/シ*セ	○
36	サラダ記念日	俵 万智 著	河出書房新社	1987. 5	911. 16 /タ17/1	○
37	土岐善麿歌集	土岐 善麿 [著]	光風社書店	1971. 6	911. 16/ト4/3	○
38	現代秀歌	永田 和宏 著	岩波書店	2014. 10	911. 16/カ*	○
39	近代秀歌	永田 和宏 著	岩波書店	2013. 1	911. 16/カ*	○
40	茂吉入門	秋葉 四郎 著	飯塚書店	2016. 12	911. 162/サ	○
41	文明開化の歌人たち	青田 伸夫 著	大空社出版	2017. 12	911. 167/オ	○
42	みだれ髪 チョコレート語訳	俵 万智 著	河出書房新社	1998. 7	911. 168/ウ	○
43	水中翼船炎上中	穂村 弘 著	講談社	2018. 5	911. 168/ホ	○
44	白秋全集 6	北原 白秋 著	岩波書店	1985. 1	918. 6/キ11/1-6	○
45	白秋全集 7	北原 白秋 著	岩波書店	1985. 3	918. 6/キ11/1-7	○
46	新選名著複刻全集近代文学館「歌集 赤光」	—	日本近代文学館	1973. 9	918. 6/シ21/19	○
47	新選名著複刻全集近代文学館「みだれ髪」	—	日本近代文学館	1973. 9	918. 6/シ21/8	○
48	特選名著複刻全集近代文学館「NAKIWARAI」	特選名著複刻全集近代文学館 編集委員会 編集	日本近代文学館	1971. 7	918. 6/=6/5-12	○
49	日本近代文学大系 16「正岡子規集」	—	角川書店	1972	918. 6/=7/16	○
50	日本近代文学大系 44「伊藤左千夫 長塚節 島木赤彦集」	—	角川書店	1972	918. 6/=7/44	○
51	日本近代文学大系 55「近代短歌集」	—	角川書店	1973	918. 6/=7/55	○
52	若山牧水全集 第1巻	若山 牧水 著	雄鶏社	1958	918. 6/ウ1/1-1	○
53	若山牧水全集 第2巻	若山 牧水 著	雄鶏社	1959	918. 6/ウ1/1-2	○
54	立原道造全集 1	立原 道造 著	筑摩書房	2006. 11	918. 68/ウ1	○
55	マンガ名詩・短歌・俳句物語 3	—	学研プラス	2020. 2	J/911/マン/3	○
56	親子で楽しむこども短歌教室	米川 千嘉子 編著	三省堂	2010. 1	J/911/ヨ	○

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
57	短歌をつくろう	栗木 京子 著	岩波書店	2010. 11	Y/911. 107 /カ	○
58	十代に贈りたい心の名短歌100	田中 章義 [編] 著	PHP研究所	2014. 12	Y/911. 108/ジユ	○
59	しびれる短歌	東 直子 著	筑摩書房	2019. 1	Y/911. 16/ヒカ	○
60	知っ得短歌の謎	國文學編集部 編	學燈社	2007. 7	タ/911. 16/シ	○

俳句に関する資料

[岩手関連]

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
61	岩手俳諧史 上巻	小林 文夫 著	万葉堂出版	1978. 12	K/902/コ1/2-1	○
62	岩手俳諧史 下巻	小林 文夫 著	万葉堂	1978. 12	K/902/コ1/2-2	○
63	風土の詩	小原 啄葉 著	角川書店	1999. 7	K/911. 304/ホ	○
64	明治秀句	山口 青邨 著	春秋社	2001. 3	K/911. 36/ヤ	○
65	暁村物語	佐藤 雅彦 著	—	2001. 3	K/911. 362/ア	○
66	明治の俳人原抱琴	浦田 敬三 [著]	岩手近代文庫	1987. 2	K/911. 362/ハ	○
67	山口青邨	斎藤 夏風 編著	蝸牛社	1997. 12	K/911. 362/ヤ	○
68	山口青邨の世界	古舘 曹人 編著	梅里書房	1991. 6	K/911. 362/ヤ	○
69	山口青邨生誕百年展	—	日本現代詩歌文学館	1991	K/911. 362/ヤ	○
70	谿の音 句集	高橋 青湖 著	高橋青湖	1959	K911. 3/タ2/1	○
71	山鳥 句集	宮野 小提灯 編	山鳥句会	1946	K911. 3/ミ1/1	○
72	山口青邨集	山口 青邨 著	俳人協会	1979	K911. 3/ヤ1/14	○
73	山口青邨集	山口 青邨 著 古舘 曹人 編	俳人協会	1989	K911. 3/ヤ1/15	○
74	山口青邨句集 自選自解	山口 青邨 著	白鳳社	1981	K911. 3/ヤ1/3	○
75	山口青邨季題別全句集	山口 青邨 [著] 夏草会 編	夏草会	1999	K911. 368/ヤ	○
76	業句の海 小説・俳人下山逸蒼	長尾 宇迦 [著]	読売新聞社	1997	K913. 6/ホ	○
77	宮沢賢治の全俳句	石 寒太 著	飯塚書店	2012. 6	ケン/911. 362/イ	○
78	杜陵吟社の三俳人 抱琴・露子・秋皎	浦田 敬三 編	盛岡市立図書館	1967	タ/910. 268/ト	○

[一般]

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
79	季語百話	高橋 睦郎 著	中央公論新社	2011. 1	911. 04/タ	○
80	俳句の歴史	山下 一海 著	朝日新聞社	1999. 4	911. 302 /ヤ	○
81	俳句入門	榎本 好宏 著	池田書店	1998. 8	911. 307/エ	○
82	今日から俳句	片山 由美子 著	NHK出版	2012. 2	911. 307/タ	○
83	岸本尚毅の俳句一問一答	岸本 尚毅 著	日本放送出版協会	2005. 11	911. 307/キ	○

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
84	あるある!お悩み相談室「名句の学び方」	岸本 葉子 著	NHK出版	2021. 1	911. 307/キ	○
85	子どもと楽しむ俳句教室	金子 兜太 監修	誠文堂新光社	2014. 6	911. 307/コト	○
86	俳句の鳥・虫図鑑	復本 一郎 監修	成美堂出版	2005. 4	911. 307/ハイ	○
87	俳句の魚菜図鑑	復本 一郎 監修	柏書房	2006. 4	911. 307/ハイ	○
88	芭蕉句集	[松尾 芭蕉 著]	新潮社	2019. 6	911. 32/マツ	○
89	蕪村俳句集	[与謝 蕪村 著]	岩波書店	1991. 1	911. 34/ヨサ	○
90	一茶俳句集	[小林 一茶 著]	岩波書店	1991. 12	911. 35/コハ	○
91	よみものホトトギス百年史	稲畑 汀子 編 著	花神社	1996. 12	911. 36/114/1	○
92	臼田亜浪全句集	臼田 亜浪 著	臼田亜浪全句集刊行会	1977	911. 36/ウ2/1	○
93	高浜虚子俳句の力	岸本 尚毅 著	三省堂	2010. 11	911. 362/カ	○
94	高浜虚子	中田 雅敏 著	勉誠出版	2007. 8	911. 362/カ	○
95	正岡子規	坪内 稔典 著	岩波書店	2010. 12	911. 362/マサ	○
96	正岡子規人生のことば	復本 一郎 著	岩波書店	2017. 4	911. 362/マサ	○
97	正岡子規	ドナルド キーン 著	新潮社	2012. 8	911. 362/マサ	○
98	正岡子規、従軍す	末延 芳晴 著	平凡社	2011. 5	911. 362/マサ	○
99	高浜虚子全俳句集 上巻	高浜 虚子 著	毎日新聞社	1980	911. 368/カ/1	○
100	高浜虚子全俳句集 下巻	高浜 虚子 著	毎日新聞社	1980	911. 368/カ/2	○
101	子規選集 4	正岡 子規 著	増進会出版社	2002. 1	918. 68/マサ/4	○
102	回想子規・漱石	高浜 虚子 著	岩波書店	2010. 1	B/911. 362/マサ	○
103	漱石俳句集	[夏目 漱石 著]	岩波書店	2008. 1	B/911. 368/ナツ	○
104	四季のことば絵事典	荒尾 禎秀 監修	PHP研究所	2009. 1	J/911/シキ	○
105	マンガ名詩・短歌・俳句物語 4	—	学研プラス	2020. 2	J/911/マン/4	○
106	俳句を遊べ!	佐藤 文香 編	小学館	2016. 3	Y/911. 304/ハイ	○
107	部活で俳句	今井 聖 著	岩波書店	2012. 8	Y/911. 307/イマ	○
108	“五・七・五”のバトル俳句甲子園	—	愛媛新聞社	2004. 12	Y/911. 367/ゴシ	○
109	ランドセル俳人の五・七・五	小林 凜 著	ブックマン社	2013. 4	Y/911. 368/コハ	○

その他 短歌・俳句に関する資料

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
110	岩手の詩歌(うた)	福来 保夫 著	久保庄書店	1969	K/900/71/1B1	○
111	資料・岩手の近代文学	浦田 敬三 著	杜陵高速印刷	1981. 12	K/902/ウ1/61	○
112	岩手の文学	北流編集委員会 編集	岩手教育会館出版部	1978	K/902/ホ1/11	○
113	岩手の近代文芸家名鑑	浦田 敬三 編	杜陵高速印刷株式会社出版部	2003. 3	K/910. 26/ウ	○

No	書名	編著者名	出版者等	出版年等	請求記号	館外貸出
114	文學の國いわて	道又 力 著	岩手日報社	2017. 6	K/910. 26/ミチ	○
115	温泉と詩歌	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2007. 3	K/911. 04/ホ	○
116	いまを生きる詩歌	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2015. 3	K/911. 08/イマ	○
117	ゲームと詩歌	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2018. 6	K/911. 08/ゲーム	○
118	詩歌と音のプリズム	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2017. 3	K/911. 08/シイ	○
119	スポーツと詩歌2016	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2016. 6	K/911. 08/ニホ	○
120	平成の詩歌人たち	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2019. 3	K/911. 08/ヘイ	○
121	われ、敗れたり	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2020. 3	K/911. 08/ワレ	○
122	花巻の文人たち	—	花巻新渡戸記念館	1992. 4	K/911. 102/ハナ	○
123	現代短詩型文学の交差点	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	1991	K/911. 16/ケン	○
124	俳句さくらまつり	日本現代詩歌文学館 編集	日本現代詩歌文学館	2004. 3	K/911. 36/ハイ	○

短歌と俳句

短歌

5・7・5・7・7の5句31音で構成される和歌のことを短歌と呼びます。短歌の起源についてははっきりしたことは分かっていませんが、日本最古の和歌集『万葉集』の存在から、奈良時代には既に短歌は詠まれていたと考えられています。

和歌とは中国の漢詩に対して発生した名称で、短歌のほかに^{ながうた}長歌や^{せどうか}旋頭歌、^{かたうた}片歌といった種類がありました。しかし平安時代以降、短歌以外の和歌はほとんど詠まれなくなり、和歌と言えば主に短歌のことを指すようになりました。

歴史の中で脈々と受け継がれてきた短歌ですが、明治時代になると^{まさおかしき}正岡子規によって短歌の革新運動が起こります。旧来の伝統にとらわれず、新しい表現方法を取り入れる革新が起こったことで、短歌の世界はより多くの人を楽しめるものへと広がっていきました。

俳句

俳句とは、5・7・5の17音でつくる詩のことで、世界一短い詩といわれています。「季語」という季節を表す言葉を入れるというルールがあります。

俳句は短歌から派生して生まれました。平安時代には主に貴族の間で親しまれた短歌は、室町時代になると上の句（5・7・5）と下の句（7・7）を別々の人が読む「連歌」となって庶民の間にも流行します。次第に、旧来の伝統にとらわれず洒落や言葉遊びなどを交えた歌が作られるようになり、そういった歌は「愉快的」という意味を持つ「俳諧」や「俳諧の連歌」と呼ばれました。江戸時代に松尾芭蕉が^{しょうふう}「蕉風」と呼ばれる独自の作風を打ち立て、俳諧は芸術にまで高められました。そのころから発句（季語を必ず入れる前半の5・7・5）が句の中心となっていきます。

明治時代になると、俳諧の革新を提唱した正岡子規によって発句は名称を「俳句」と改められ、一般に定着します。発句の形式が俳句として定着したことで、俳句は短詩型文芸として確立され、今日まで続く日本の代表的な文芸のひとつとなりました。

近代いわての歌人・俳人

明治時代

明治の短歌

明治33年(1900)、当時盛岡中学校の生徒であった金田一京助の短歌が、与謝野鉄幹が主宰する文芸誌『明星』に掲載されます。京助は号を花明と称して、学生時代から短歌を投稿していました。

京助の盛岡中学校の後輩には石川・木がいました。・木は校内で短歌グループ・^{はくようかい}白羊会を結成するなど文学活動に勤しみますが、文学で身を立てるために中退し、上京します。明治30年代は特に、^{たかのとうそん}高野桃村らによる^{ゆうくん}幽薫会(36年)、^{ほそごえやう}細越夜雨らによる^{あんちょう}闇潮会(37年)など学生らによる短歌グループの結成が活況となった時代でした。

明治42年(1909)、二戸郡浄法寺村(現・二戸市浄法寺町)で教師をしていた^{おだしまこしゅう}小田島孤舟は、村医として着任した^{あいざわぎょうそん}俳人・相沢暁村と提携して^{こうや}曠野社を結成します。発行文芸誌の『曠野』は中央の歌人らも作品を寄せ、地方文壇と中央文壇をつなぐ重要な役割を果たします。

明治43年(1910)には、・木の第一歌集『一握の砂』が発行されます。生活を率直に見つめる姿勢に豊かな情緒が結びついた作風と、3行書きという独特な形式の短歌は人々の話題となりました。更なる活躍が期待された・木でしたが、2年後の明治45年(1912)に病死します。同年、友人らの手によって第二歌集『悲しき玩具』が発行されました。

■ ^{はくようかい}白羊会

明治34年(1901)、当時の盛岡中学校に在籍していた生徒たちで白羊会という短歌グループが結成されました。中心人物は当時4年生だった石川・木です。

メンバーには『岩手毎日新聞』の主筆^{おかやまふい}岡山不衣や、時代小説『銭形平次』の作者・野村胡堂、医学博士・小林茂雄など、のちに各分野で名をのこした人物たちが在籍していました。会には文芸を愛する生徒たちが上級生・下級生の垣根なく集い、日々切磋琢磨していました。

白羊会は『岩手日報』紙上に「白羊会詠草」として7回にわたって短歌が掲載されたほか『盛岡中学校校友会雑誌』にも作品を寄稿するなど、積極的に活動していたようです。しかし、中心となって活動していた・木の退学などを経て、活動は自然に衰微していきました。

■ 石川・木

明治 19 年(1886)、岩手県南岩手郡日戸村(現・盛岡市日戸)で生まれた石川・木は、盛岡中学校在学中、上級生であった金田一京助や野村胡堂から文芸雑誌『明星』を紹介されたことをきっかけに文学の世界に没頭していきます。明治 35 年(1902)に文学で身を立てるべく学校を退学すると、住まいや仕事を転々としながら、東京や北海道など各地を渡り歩きます。生活に苦しみながらも文学の道を歩み続ける激動の人生を送りますが、明治 45 年(1912)、26 歳の若さで病死します。

・木は伝統的な短歌の表現・内容に対する革新として、表記や内容の自由を主張しました。3 行書きという独特な形式での歌作や、生活の実感を重んじる作風にその実践が表れています。日々の生活を素直に表現しながらも単に写実に徹するのではなく、抒情的な魅力をも含んだ・木の短歌は、今なお多くの人々の共感を呼んでいます。



石川啄木
[写真提供：石川啄木記念館]

明治の俳句

明治に入り、人々の生活様式が変わると、俳人たちの間にもその影響が表れてきます。

明治 20 年代になると正岡子規によって、旧来の俳句から着想を得ようとする旧派から抜け出し、多様で新たな視点を取り入れた俳句を生み出そうとする革新運動が起こります。その中で子規は、絵画の「写生」の手法を取り入れ、視覚的な表現で俳句を詠む現在の俳句のスタイルを確立しました。

明治 30 年(1897)には、子規らが中心となり俳句雑誌『ホトトギス』を刊行。その影響は全国へと広がり、県内の俳人たちも旧派から脱していくこととなります。

盛岡中学校(現・盛岡第一高等学校)から東京の学校に転校し正岡子規に師事していた原抱^{はらほう}琴^{きん}は、帰省の度に働きかけ、明治 32 年(1899)に盛岡中学校の在校生らによる杜陵吟社^{とりょうぎんしゃ}という俳句グループを結成します。杜陵吟社は、秋田県下を俳句行脚し、高松の池に船を浮かべて宴を催すなど活発に活動しました。やがて、杜陵吟社は紫苑会^{しおんかい}として引き継がれ、原抱琴を顧問・選者にして俳句雑誌『紫苑』を発行しました。

■ はらほうきん
原抱琴

明治16年(1883)盛岡生まれの俳人です。本名は、^{はらとおる}原達。平民宰相・原敬の甥にあたります。子供のいない原敬は、抱琴の将来に大きな期待を抱いていたといわれています。盛岡中学校から東京府立第一中学校(現・東京都立日比谷高等学校)に転校。中学時代から『ホトトギス』に投稿し、正岡子規に才能を認められ師事します。その後、第一高等学校(現・東京大学教養学部)に入学しますが病気により中退。新たに東京外国語学校(現・東京外国語大学)に入学して首席で卒業します。そして東京帝国大学(現・東京大学)へと進みます。常に成績優秀、文才に恵まれ、人柄も良く多くの人に好かれましたが、身体が弱く、明治45年(1912)の卒業直前、原敬、正岡子規らにその才能を惜しまれつつ30歳の若さで病没しました。

金田一京助、野村胡堂らの先輩として、盛岡中学校に文学の胚種を植え付けたとも評されています。



原抱琴
[写真提供：盛岡市先人記念館]



『紫苑 第二号』[当館所蔵]

■ 俳句雑誌『紫苑』

原抱琴を中心に結成された俳句グループ杜陵吟社は、やがて社会人となった俳人たちによって、紫苑会となります。

紫苑会は、明治36～37年(1903～1904)に、盛岡で俳句雑誌『紫苑』を刊行します。『紫苑』は正岡子規の流れを組む『ホトトギス』系の俳句雑誌でした。第4号には夏目漱石の『俳句と外国文学』が掲載されるなど、全国屈指の俳句雑誌といわれています。

しかし、主力となった俳人たちの上京・卒業が相次ぎ、6号で終刊となりました。

大正時代

大正の短歌

大正元年(1912)、小田島孤舟は浄法寺村(現・二戸市浄法寺町)で第1歌集『郊外の丘』を出版します。当時地方で個人の歌集を出版するのは珍しく、盛岡中学校の生徒であった宮沢賢治も購入し、読んでいたようです。賢治自身も、大正時代に多くの短歌を遺しています。

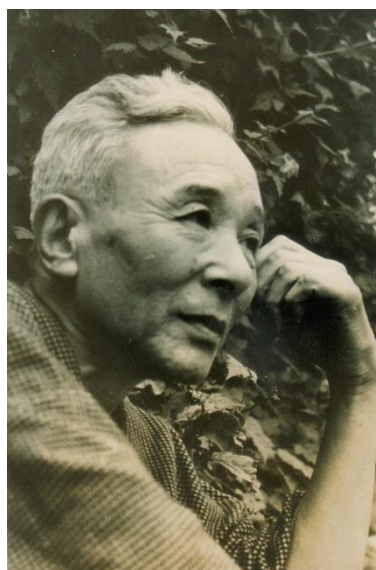
大正12年(1923)の年末、『岩手日報』紙上で歌を詠むことの意味を巡り激しい論争が展開されます。論陣を張ったのは、下山清しもやまきよしと小原節三おぼらせつぞうという二人の歌人でした。清が『岩手日報』の紙上で「歌など一種の遊戯に過ぎぬ」と述べたことに対し、節三は「(歌は)遊戯であるかも知れない。ただあまりに涙ぐましい遊戯である」と返しています。短歌を「生活の頂点」とした節三と「爪の垢ほどの慰藉いしげ」とした清の論争は結果として平行線のまま終わってしまいます。しかし、歌を詠む意味という根本的な問題について交わされた論議は、岩手の短歌史のなかだけに留まらず、文芸という営みを語る上でも印象深い出来事と言えます。

■ 小田島孤舟おだしまこしゅう

岩手県を中心に活動した歌人です。清雅な書風を持つ書家でもあり、また『岩手教育』などの編纂を手がけた教育者としても知られています。

孤舟は自らの歌作に励む一方、多くの短歌団体の結成や文芸誌の発行にあたり、岩手の短歌文芸の振興に寄与しました。明治42年(1909)に俳人・相沢暁村と発行した詩歌誌『曠野こうや』は、中央で活躍する文人たちからの寄稿も多く、岩手の文壇と中央文壇をつなぐ大きな架け橋となります。ほかにも岩手歌人協会の設立や、多数の短歌会の指導にあたり、明治・大正・昭和と時代を通じて短歌文芸に積極的に携わりました。その多彩な活動から「岩手歌壇の父」と称されています。

孤舟の土沢尋常高等小学校時代の同級生に、洋画家・萬鉄五郎がいます。当初画家を志していた孤舟ですが「萬の画力には及ばなく、画家の道を思いとどまった」と短歌に遺しています。二人の交流はその後も続き、歌集の表紙画の多くを萬が描いています。



小田島孤舟
[写真提供：盛岡市先人記念館]

■ 宮沢賢治

宮沢賢治といえば『春と修羅』のような詩や『注文の多い料理店』に代表される童話が有名ですが、学生時代を中心として、短歌の創作にも力を入れていました。特に大正5、6年(1916-1917)には集中して数多くの短歌を創作しており、友人の保阪嘉内ほさかかないとともに発行した同人雑誌『アザリア』には62首もの短歌を発表しています。

賢治の短歌は、その特異な着眼点と感性豊かな比喩表現の独自性で知られ、31文字という短さのなかにも自由で独特な世界観を作り上げました。なかには、方言を用いた会話文のみで構成されたユニークな歌や、宇宙から地球を眺める壮大なスケールで詠まれた歌もあります。「シグナル」や「どんぐり」など、その後創作する童話や詩などに通じるモチーフが登場する点も見逃せません。

大正の俳句

大正になると、若くして亡くなった正岡子規の後を継いで『ホトトギス』の刊行を続けた高浜虚子たかはまきよし、その虚子から俳句を学び俳句雑誌『石楠』しやくなげを創刊した白田亞浪うすだあろうらが相次いで来県。盛岡を中心に講演・句会などが開かれました。

このような流れの中で、大正初期には盛岡で高橋青湖たかはしせいこらにより、『石楠』系の俳句雑誌『自然味』しぜんみが誕生しました。

一方、盛岡に生まれ24歳で渡米した下山逸蒼しもやまいっそうは、在米の邦字新聞数紙に俳句を発表しました。俳人としての名声が高まると、逸蒼は大正2年(1913)ロサンゼルスで俳句結社『紙燭会』しそくかいを結成します。会の名称は、日本人移民の心に俳句で火を灯したいという思いからでした。

■ 高橋青湖

明治22年(1889)盛岡生まれの俳人。本名は初五郎。盛岡商業学校を経て、通信官吏練習所ていしんかんり(郵便や通信を取次ぐ職員の養成所)を卒業。その後、郵便局に勤めます。盛岡郵便局に勤務する中、俳句に熱心となり、局内で句会を興します。大正4年(1915)には、盛岡にて不來方吟社を結成。始めは『ホトトギス』に投句していましたが『石楠』に移ります。そして、俳句人口の拡大を図り、自らの修練の場にするため、盛岡で俳句雑誌『自然味』を創刊。他県でも広く同人や選者となり、全国的に知られることとなります。

青湖は郷里の自然をこよなく愛し、スケールの大きい感覚的な句を多く残しています。後進の指導に当たっては、風雅の誠を大切に、自然の中の美を発見するよう強調。一人一人の個性さえ出せば、派にこだわることはないという姿勢を貫きました。

晩年は子息が暮らす兵庫県西宮市に移り、昭和55年(1980)に92歳の生涯を終えました。盛岡天満宮の境内には、青湖の句碑が建立されています。

■ 俳句雑誌『自然味』^{しぜんみ}

大正 6 年(1917)、高橋青湖が結成した不来方吟社の機関誌として発行されました。青湖が主宰し、『石楠』系の指導者を選者に迎えました。その後、『ホトトギス』系を圧倒する勢いを示すまでになりました。大正・昭和の県内の俳人たちに大きな影響を与え、多くの優れた俳人を中央に送り出しました。

太平洋戦争が激化すると、『自然味』も休刊を余儀なくされます。しかし、終戦後の昭和 20 年(1945)には早くも復刊を遂げました。

当時の県内では『ホトトギス』系の俳人が多数を占めていた中で、青湖は派を超えて俳諧の発展に尽くしたといわれています。そうした姿勢から多くの後輩に慕われ、『自然味』は長きにわたり刊行を続けます。昭和 56 年(1981)12 月、通巻第 641 号をもって終刊となりました。



『自然味 第一号』[当館所蔵]

■ 下山逸蒼^{しもやまいっそう}

明治 12 年(1879)盛岡生まれの俳人。本名は英太郎。実弟によると、「逸蒼」とは、「蒼海を逸する」つまり、太平洋を渡って戻らないという意味であったとのこと。

逸蒼は幼くして父と死別し、岩手県庁の給仕をしながら資格を取り、県の土木技手になります。そのかわら、旧派から俳句を学びました。

明治 36 年(1903)に、立身出世のためサンフランシスコに渡ります。言葉は通じず、技手の経験も役に立たず、荒れた生活の中で好きな句作だけが逸蒼の心を癒します。逸蒼は、日本と異なるアメリカの風物を捉えるためには、俳句の五七五の定型を壊さなければと考えました。そして、正岡子規らの流れを飛び超えて、定型や季語に捉われない自由律俳句を創作しました。後半生は病気、障がいと闘い、俳句の創作とその指導に明け暮れました。

昭和 10 年(1935)65 歳で生涯を終え、サンフランシスコの日本人移民の共同墓地に眠っています。



下山逸蒼
[写真提供：盛岡市先人記念館]

昭和初期

昭和初期の短歌

昭和2年(1927)、当時東京都・巣鴨に住んでいた菊池知勇がぬはり社を結社し、歌誌『ぬはり』を刊行します。知勇が東磐井郡渋民村(現・一関市大東町曾慶)出身だったこともあり、『ぬはり』には多くの岩手歌人が参加しました。同じころ、岩手では小田島孤舟が代表となり岩手歌集刊行会が結成され、機関誌『岩手歌集』を発行しています。

翌年の昭和3年(1928)には川合祐六らがみちのく社を結成します。機関誌『みちのく』を発行するほか個人の歌集発行にも力を入れ、下山清の歌集『わくら葉』などを発行しています。

昭和12年(1937)、小田島孤舟は関登久也らと第2次岩手歌人協会を結成します。これは大正12年に結成された岩手歌人協会の後続にあたるもので、機関誌『岩手歌人』を昭和19年(1944)までに16冊発行します。同年には、西塔幸子の遺稿歌集『山峡』が出版されました。

終戦翌年の昭和21年(1946)、巽聖歌が沼宮内で新樹社を結社し、戦後の青少年を文学運動によって安定させるとともに、詩歌文芸の後進の育成に努めました。

■ 下山 清

下山清は沼宮内小学校4年生の時に脳膜炎を患い、片目の視力と聴力を失います。残る一方の目も近視が強く、書物をかなり近づけないと見えないほどだったようです。そのため小学校は途中で除籍されてしまいますが、学力はとびぬけて優秀で『万葉集』などをそらんじるほどだったと言います。

実家の継母とうまくいかず知人を頼り放浪の生活を続けますが、その傍ら小田島孤舟や関登久也と交遊し小原節三とは短歌創作の意義について論戦を交わすなど、苛酷な日々の中で短歌を心のよりどころとして生きていたことが伺えます。清の短歌について、親友である作家の森荘巳池は「芸術的に純粹で格調の高い作品」と述べています。発表した歌集はみちのく社から発行された『わくら葉』のみですが、発行の辞には「薄幸の天才歌人」としつつも「作者個人の運命をハンディキャップとして考慮せよと要求するのでは断じてなく、且もっとも不要なことである」と清の才能を評価する言葉が残されています。

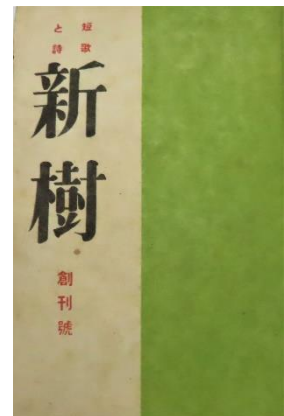


下山 清
[『歌集 わくら葉』より]

■ たつみ せい か
巽 聖歌

巽聖歌は、児童文学や童謡詩を創作する一方で短歌創作にも力を入れていました。北原白秋に師事した聖歌は、歌集こそ発行しませんでした。白秋主宰の短歌雑誌『多磨』などに多くの短歌を寄稿しています。その作風は、師である白秋の風韻を継ぐ一方で、知的な抽象表現の方法を取り込み新風を切り開いていこうとした跡が見て取れます。また、聖歌自身の人間味が感じられるような親しみのある温かさも特徴のひとつです。

聖歌は昭和 21 年(1946)に疎開先の沼宮内で詩歌雑誌『新樹』を創刊します。巻頭に記された「新樹は、そういうわたくしを中心として、集ってきた若い元気な人達の集りである。(中略)わたくしは正しく伝えようとしている。日本詩歌万代のためである」という言葉から、詩歌文芸の後進を育てようという聖歌の意気込みが感じられます。



『新樹 創刊号』[当館所蔵]

■ さいとうこうこ
西塔幸子

西塔幸子は明治 33 年(1900)、紫波郡不動村(現・矢巾町白沢地区)の大村家に生まれました。大正 8 年(1919)に岩手師範学校を卒業して教師となると、初任地の久慈尋常高等小学校を振出しに、現在の洋野町や宮古市、山田町、岩泉町、田野畑村など県内各地の小学校で勤務します。

夫・西塔庄太郎の酒乱や、凶作に喘ぐ貧しい地方での暮らしなど、幸子の生活は決して華やかなものではありませんでした。しかし「作歌の多かったのは生活が安易で暇の比較的多かった時ではなく、^{かえ}反ってその反対の場合のやうです」と幸子自身が語るように、厳しい中でも生活に向き合い、実直に生きようという信念が歌作の原動力となりました。

昭和 11 年(1936)5 月、急性関節リウマチを発病しながらも四男を出産しますが、同年 6 月には肺炎を併発してしまいます。幸子は 7 人の子どもと 2 千余りの歌を遺し、36 歳の若さで亡くなりました。

■ やまかい
『山峡』

西塔幸子の死から 1 年余りが過ぎた昭和 12 年(1937)9 月、幸子のはじめての作品集『山峡』が発行されます。幸子は生前多くの短歌を作りながらも、歌集を発行したことがありませんでした。病床の幸子は、弟に「死後歌集の出版を頼む」と言葉を遺しており、歌集は幸子の弟である大村次信によって発行されました。

幸子の短歌について、次信は「姉の歌は苦しき生活の中からうめき出されたもので

あり、筆先の歌ではない」とした上で「私の姉は不幸の反面のみ見る性ではなかった。むしろ不遇な生活の中に幸福を見出せるだけ見出した姉である」と述べています。

貧しさに喘ぐ地方での生活や家庭苦のなかでも、ひたむきに前を見つめ、己の生涯を生き抜いた幸子の短歌は、時代を経た今もなお私たちの心を打ちます。



西塔幸子 [『山峡』より]



『山峡』西塔幸子著 大村次信編
[当館所蔵]

昭和初期の俳句

昭和に入ると、岩手の俳壇は大正から引き続き『石楠』系の俳句が主流を占めていました。

しかし、そこに盛岡出身の山口青邨^{やまくちせいそん}が『ホトトギス』に華々しく登場します。昭和5年に青邨と宮野小提灯^{みやのこちょうちん}による盛岡発の『ホトトギス』系の俳句雑誌『夏草』^{なつくさ}が創刊されると、岩手の俳壇は一気に『ホトトギス』系一色に塗りつぶされていきました。『夏草』は昭和15年に発行所を東京に移します。青邨は『夏草』を主宰する傍ら、新聞・雑誌で選者としても活躍し多くの俳人を育てました。

昭和4年には『岩手俳句集』が出版されました。その当時の、明治・大正・昭和の県内の俳人が総覧できる内容となっています。

■ 山口青邨^{やまくちせいそん}

明治25年(1892)、盛岡生まれの俳人で鉱山学者。本名は吉郎。盛岡中学校(現・盛岡第一高等学校)、第二高等学校(現・東北大学)と進み、東京帝国大学工学部を卒業。後に東京帝国大学教授を務め、昭和28年(1953)には東京大学名誉教授となりました。

青邨は、大正7年(1918)から『ホトトギス』を読み始め句作を思いたちます。大正11年(1922)に東大に俳句会をつくり、翌年に正岡子規の弟子・高浜虚子に師事しま

す。虚子は子規の写生の手法を受け継ぎ自ら提唱した
花鳥諷詠（自然界と人間界の現象をそのまま客観的に歌
い上げること）を俳句の理念としましたが、青邨は、客
観的な写生や花鳥諷詠だけではなく主観も大事にしまし
た。どちらか一方に偏るのではなく、その調和を重んじ
ました。

青邨は、俳人の育成など俳句の世界に大きな足跡を遺
し、昭和 63 年(1988)に亡くなりました。北上市の日本現
代詩歌文学館の敷地内には、青邨が東京杉並区で過ごし
た自宅が移築復元されています。



山口青邨
[写真提供：盛岡市先人記念館]

■ みやのこちょうちん 宮野小提灯

明治 28 年(1895)盛岡生まれの俳人。本名は藤吉。盛岡市下橋高等小学校を卒業し、
家業の米穀商を継ぎます。15 歳の頃、お盆に軒下につるされている行燈に書かれた俳
句に魅せられ句作を始めたと述べています。

大正 3 年、高浜虚子に師事しようと『ホトトギス』に投句します。昭和 5 年(1930)
には、山口青邨が選者、小提灯が編集・発行者となり俳句雑誌『夏草』を創刊しまし
た。

小提灯は、生涯を庶民の俳人として生き、地
方色の濃い、都会派風の俳句では味わえない趣
のある句を多く残しました。そして、その土地
に生活している者でなければ作れないような、
土着の視点で句作を続けました。

昭和 49 年(1974)に、心不全のため 78 歳の生
涯を閉じました。盛岡城跡公園には、小提灯の
句碑が建立されています。



宮野小提灯
[写真提供：盛岡市先人記念館]

■ 俳句雑誌『夏草』

山口青邨が主宰した俳句雑誌です。『夏草』はのちに全国でも有数の俳句雑誌とな
りましたが、始まりは盛岡で発行された小冊子でした。

宮野小提灯が『ホトトギス』に投句していると、俳句も文章もずば抜けた人物がい
ることに気がきます。その人物が、同じ盛岡出身の青邨でした。

昭和 4 年の夏に、ふたりは盛岡で初めて出会います。家業の米穀店を営む小提灯は
34 歳、東京帝国大学工学部助教授の青邨は 37 歳でした。この時、二人は県内の『ホ
トトギス』系の俳人を集めて雑誌を出そうと意気投合します。

昭和5年、東京在住の青邨を選者とし、小提灯の編集・発行により俳句雑誌『夏草』が盛岡で創刊されました。昭和15年には発行所を東京に移し、青邨は主宰となります。

青邨が亡くなった後の平成3年(1991)5月通算650号をもって終刊となりました。

主な参考文献

【第1章 短歌と俳句】

- 『これだけは知っておきたい現代俳句の基礎用語』 石寒太//著 平凡社 2003
『写真で読み解く俳句・短歌・歳時記大辞典』 塩見恵介//監修 あかね書房 2015
『詩歌作者事典』 志村 有弘//監修 詩歌作者事典刊行会//編 鼎書房 2011
『正岡子規』 ドナルド キーン//著 角地 幸男//訳 新潮社 2012
『歌よみに与ふる書』 正岡子規//著 岩波書店 1984
『現代短歌大事典』 篠 弘//監修 馬場 あき子//監修 佐佐木 幸綱//監修 大島 史洋//[ほか]編集委員 三省堂 2000

【第2章 近代いわての歌人・俳人】

<全体に関わるもの>

- 『文學の國いわて 明治大正昭和平成 輝ける郷土の作家たち』道又力//著 岩手日報社 2017
『資料・岩手の近代文学』 浦田 敬三//著 杜陵高速印刷 1981
『岩手の文学 評価と展望』 北流編集委員会//編集 岩手教育会館出版部 1978
『岩手県の百年』 長江 好道//[ほか]著 山川出版社 1995
『岩手百科事典 新版』 岩手放送岩手百科事典発行本部//編 岩手放送 1988
『岩手百科事典』 岩手放送岩手百科事典発行本部//編 岩手放送 1978
『盛岡市史 復刻版 第7巻』 盛岡市史編纂委員会//編 トリョーコム 1980
『現代短歌ハンドブック』 小池 光//[ほか]編 雄山閣出版 1999
『現代短歌大事典』 篠 弘//監修 馬場 あき子//監修 佐佐木 幸綱//監修 大島 史洋//[ほか]編集委員 三省堂 2000

<短歌>

- 『石川啄木事典』国際啄木学会／編　おうふう 2001
『石川啄木余話』藤田 庄一郎／著　武蔵野書房 1994
『初期啄木短歌とその周辺の資料』布野 栄一／著　日本大学国文学会 1968
『第 34 回 盛岡市先人記念館企画展 小田島孤舟 岩手歌壇の父』盛岡市先人記念館 2005
『曠野をゆく 小田島孤舟伝』堀内 正己／著　国書刊行会 1973
『宮沢賢治研究資料集成 第 17 巻』続橋 達雄／編　日本図書センター 1992
『賢治の短歌百首かるた』[宮沢賢治生誕 120 年記念事業実行委員会] 2016
『賢治短歌へ』佐藤 通雅／著　洋々社 2007
『企画展示 宮沢賢治短歌の世界』宮沢賢治記念館／監修
『宮澤賢治歌集』宮澤 賢治／著 森 荘巳池／校註
『歌集 わくら葉』下山 清／著 佐藤 長次郎／編集 岩手町教育委員会 1961
『みちのく文学の旅』新月通正／著 朝日ソノラマ 1978
『四重苦の放浪歌人 下山清ノート』森 荘巳池／編著 翠楊社 1979
『巽聖歌作品集』聖聖歌／著 巽聖歌作品集刊行委員会 1977
『新樹 創刊号』新樹社 1946

<俳句>

- 『岩手俳諧史 下巻』小林 文夫／著 万葉堂 1978
『俳句の歴史 室町俳諧から戦後俳句まで』山下 一海／著 朝日新聞社 1999
『岩手の文学碑』六岡 康光／著 岩手日報社 1981
『いわて人物ごよみ 365 人 新訂版』浦田 敬三／共著 藤井 茂／共著
熊谷印刷出版部 2006
『岩手人名辞典』浦田 敬三／著 藤井 茂／著 新渡戸基金 2009
『子どもと楽しむ俳句教室 豊かな感性と国語力を育てる』金子 兜太／監修
誠文堂新光社 2014
『正岡子規』ドナルド キーン／著 角地 幸男／訳 新潮社 2012

参考ウェブサイト

-
- ・ ジャパンナレッジ Lib <https://japanknowledge.com/library/>
・ 日本現代詩歌文学館 ホームページ <https://www.shiikabun.jp/>
・ 盛岡市先人記念館 ホームページ <https://www.mfca.jp/senjin/>

展示資料目録

近代いわての歌人・俳人

発行日 令和3年7月31日

発行者 岩手県立図書館

〒020-0045

岩手県盛岡市盛岡駅西通1-7-1 いわて県民情報交流センター・アイーナ内

TEL 019-606-1730 FAX 019-606-1731

HP アドレス <http://www.library.pref.iwate.jp/>
